

**研究拠点形成事業**  
**平成 26 年度 実施報告書**  
**B.アジア・アフリカ学術基盤形成型**

### 1. 拠点機関

日本側拠点機関：	京都大学霊長類研究所
(コンゴ民主共和国) 拠点機関：	生態森林研究センター
(コンゴ民主共和国) 拠点機関：	キンシャサ大学
(ギニア共和国) 拠点機関：	ボッソウ環境研究所
(ギニア共和国) 拠点機関：	ンゼレコレ大学
(ウガンダ共和国) 拠点機関：	ムバララ科学技術大学
(ウガンダ共和国) 拠点機関：	マケレレ大学

### 2. 研究交流課題名

(和文)： チンパンジー属類人猿の孤立個体群の保全に関する研究  
(交流分野：自然人類学 )

(英文)： Conservation of isolated populations of great apes of the genus Pan  
(交流分野：Physical anthropology )

研究交流課題に係るホームページ：

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/sections/aaspp/index.html>

### 3. 採用期間

平成 24 年 4 月 1 日 ～ 平成 27 年 3 月 31 日

( 3 年度目)

### 4. 実施体制

#### 日本側実施組織

拠点機関：京都大学霊長類研究所

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：所長・平井啓久

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：教授・古市剛史

協力機関：

事務組織：京都大学霊長類研究所事務部

責任者（職・氏名）：事務長・俣野 正

担当者（職・氏名）：研究助成掛長・植田忠紘

**相手国側実施組織**（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

（1）国名：コンゴ民主共和国

拠点機関：(英文) Research Center for Ecology and Forestry

(和文) 生態森林研究センター

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

General Director・MONKENGO-MO-MPENGE Ikali

協力機関：(英文)

(和文)

（2）国名：コンゴ民主共和国

拠点機関：(英文) University of Kinshasa

(和文) キンシャサ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

Faculty of Science・Professor・BEKELI Mbomba Nseu

協力機関：(英文)

(和文)

（3）国名：ギニア共和国

拠点機関：(英文) Environmental Research Institute of Bossou

(和文) ボッソウ環境研究所

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

General Director・SOUMAH Aly Gaspard

協力機関：(英文)

(和文)

（4）国名：ギニア共和国

拠点機関：(英文) University of N'Zerekore

(和文) ンゼレコレ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

Faculty of Environment・Researcher・BAMAMOU Cece

協力機関：(英文)

(和文)

(5) 国名：ウガンダ共和国

拠点機関：(英文) Mbarara University for Science and Technology

(和文) ムバララ科学技術大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文)

Faculty of Science・Dean・ANGUMA Simon

協力機関：(英文)

(和文)

(6) 国名：ウガンダ共和国

拠点機関：(英文) Makerere University

(和文) マケレレ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文)

Department of Zoology・Associate Professor・BARANGA Deborah

協力機関：(英文)

(和文)

## 5. 研究交流目標

### 5-1. 全期間を通じた研究交流目標

日本の霊長類学は、ヒトのルーツを探ることを目標として、50年以上前から類人猿の野外研究を続けてきた。とくに京都大学霊長類研究所は、ヒトにもっとも近いチンパンジー (*Pan*) 属のチンパンジーとボノボの長期調査地を3か所もかかえ (チンパンジー：ギニア共和国・ボソウ、ウガンダ共和国・カリンズ、ボノボ：コンゴ民主共和国・ワンバ)、霊長類学の国際的センターとなっている。しかし現在、これらの調査地の個体群は、森林伐採や農地開発などによって孤立し、地域住民の森林資源の利用による植生の質の低下、密猟等の違法行為、孤立による遺伝的多様性の低下、ヒトから類人猿への病気の感染など様々な要因によって、存続上の危機にさらされている。本計画では、これらのリスク要因を回避するための自然科学・社会科学的調査・研究を行ってその成果をそれぞれの調査地での保全の実践に生かし、さらにその手法を同様の問題をかかえるアジア・アフリカの様々な類人猿生息地に発信していくことを目標とする。

当研究所は、平成21～23年度にアジア・アフリカ学術基盤形成事業の支援を受けて、コンゴの生態森林研究センター、ギニアのボソウ環境研究所、ウガンダのムバララ科学技術大学とネットワーク型の研究基盤を築いて類人猿の環境適応機構についての比較研究を行ってきた。この結果、日本・アフリカ間のみならずアフリカ側拠点機関間の交流も深まり、アフリカ側研究者の学術的意識と研究能力も飛躍的に高まった。本計画では、あらたに3つの拠点機関を加えてネットワークの拡充と強化を図り、本研究課題のみならず、将来様々なテーマの類人猿の比較研究をアフリカ側研究者と協力して行える土俵としたい。また、23年8月にコンゴで行った締めくくりの国際シンポジウムでは、アフリカ側拠点機関から、このネットワークをもとにアフリカ霊長類学会の設立を目指すべきだとの提言が

あった。日本の主導によってアフリカ霊長類学会を設立するというこの長年の夢についても、本計画の3年間に実現にむけた道筋をつけたい。

## 5-2. 平成26年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

本年度のセミナーは、12月にウガンダ共和国で開催する。アフリカ側研究期間相互訪問の若手研究者およびセミナー参加者のシニア研究者をあわせて、本経費からコンゴ民主共和国4人、ギニア4人、ウガンダ4人、日本1人が参加する他、他経費から日本4人、英国1人（日本側参加者）の参加を予定している。研究拠点のマケレレ大学でのシンポジウムの前後に、ゴリラとチンパンジーの調査地であるブウィンディ国立公園とチンパンジーの調査地であるカリンズ森林保護区の研究と保護活動の視察を企画しており、研究機関相互訪問プログラムの若手研究者の相互交流も計る。

本事業の最後となるマケレレ大学でのシンポジウムでは、1日目～2日目前半を研究報告にあてるほか、2日目後半を本事業の最終目的である African Consortium of Primate Research and Conservation（仮称）の設立会議とし、組織や運営体制、今後の活動目標などを定める。このコンソーシアムが設立されることで、本事業が目標としてきた日本とアフリカ諸国の学術研究協力基盤のネットワークの核が形成されることが期待される。

### <学術的観点>

本年度は、これまでの3年間に収集してきたチンパンジーおよびボノボの糞サンプルからのDNA抽出と分析を一括して進める。これにより、各地域集団の遺伝的多様性についての除法が得られ、遺伝的多型の分布様式に関する学術的知見とともに、両種の保護政策の立案に役立つ知見が得られる。また、本事業で設立されるコンソーシアムは、今後さまざまな形の共同・比較研究の遂行に多きく貢献する。

### <若手研究者育成>

24年度、25年度と相互訪問およびシンポジウムに参加した日本およびアフリカ6拠点期間の若手研究者は、研究に対する意識きわめて強くなり、その多くは現在それぞれに自主的な研究活動に着手している。また、本年設立予定のコンソーシアムでは、運営等中心的な役割をこれら若手研究者に担ってもらうことにしており、組織運営や交流の維持といった面でも、彼らが大きく成長してくれることが期待される。

### <その他（社会的貢献や独自の目的等）>

African Consortium of Primate Research and Conservation の設立は、先進国の研究をアフリカ研究機関が手伝うというこれまでの枠組みを大きく変えるポテンシャルを持っている。アフリカ拠点期間の参加者の多くもこのことのもつ意義を高く評価している。本事業の3年間はこのコンソーシアムの設立という緒に就いたところで終了するが、今後も何らかの形でこのコンソーシアムの発展を支援し、アフリカ人研究者の自立を促すとともに、

ネットワーク型の研究協力体制をより広範かつ強力なものにしていきたい。

## 6. 平成26年度研究交流成果

(交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。)

### 6-1 研究協力体制の構築状況

本年度のセミナーは、移動日を含め、12月15日から26日までウガンダ共和国で開催した。この間16日にはゴリラとチンパンジーの調査地であるブウィンディ国立公園で研究と保護活動の視察、18日～19日はマケレレ大学におけるシンポジウム、21日～25日はカリンズ森林保護区とクイーンエリザベス国立公園で研究と保護活動の視察を行った。このセミナーには、アフリカ側研究期間相互訪問の若手研究者およびセミナー参加者のシニア研究者をあわせて、本経費からコンゴ民主共和国4人、ウガンダ7人、ケニア1人、イギリス2人、ベルギー1人、日本4人が参加した他、他経費からコンゴ民主共和国2人、ウガンダ7人、ケニア1人、ルワンダ1人、日本4人が参加した。また、このほか、シンポジウムの会場となったマケレレ大学の教員、学生も多数参加した（シンポジウム参加者リスト参照）。

残念ながら、当初予定していたギニアからの参加は、当該国におけるエボラ出血熱の流行のため見送らざるを得なかった。しかし、本事業の海外拠点研究機関以外からも、コンゴ民主共和国の自然科学研究所、ケニアの霊長類研究所およびアフリカ野生動物基金、ルワンダの生物多様性メディアグループから代表者が参加したほか、ウガンダ国内の研究機関およびNGOからも多数の参加があり、研究協力体制は大いに強化された。また、シンポジウムの前後に行った研究と保護活動の視察では、異なる国の実情について、日本とアフリカ各国の研究者の相互理解が深まった。

本事業の最後となる、2日目後半を本事業の最終目的である African Consortium of Primate Research and Conservation (仮称) の設立会議とし、組織や運営体制、今後の活動目標などを定める。このコンソーシアムが設立されることで、本事業が目標としてきた日本とアフリカ諸国の学術研究協力基盤のネットワークの核が形成されることが期待される。

### 6-2 学術面の成果

マケレレ大学でのシンポジウムでは、1日目～2日目前半を研究報告にあて、本事業の主な目的である類人猿の孤立個体群の保全に関する各国各研究機関の取り組みの現状を共有することができた。

また本年度は、これまでの3年間に収集してきたチンパンジーおよびボノボの糞サンプルからのDNA抽出と分析を行った。分析結果の解析は現在もまだ進行中であるが、生物の生存可能性に直結すると考えている免疫系を司るMHC領域の多様性が、研究対象としているチンパンジーやボノボの孤立個体群できわめて小さくなっているなど、保護政策の立案にとっても非常に重要なことが明らかになりつつある。

このほかにも、日本およびアフリカ、ヨーロッパ諸国の本事業参加研究者による類人

猿の行動や生態に関する共同研究論文を多数出版したほか、そういった研究を集めた英語書籍が、Springer 社から本年 5 月までに出版されることになった。

### 6-3 若手研究者育成

上記のシンポジウムおよびその前後のエクスカージョンには、日本とアフリカの多数の若手研究者が参加して、研究交流を行った。この経験に刺激を受けてウガンダ・マケレレ大学の修士課程大学院生がカリンズ森林での霊長類の研究を始めるなど、具体的な動きも出てきている。また、次に述べる Africa Primatological Consortium は、同じくマケレレ大学を出て現在ベルギーのアントワープ大学の博士課程に進学している若手研究者に事務局を任せることにした。こういった経験を通じて、研究だけでなく、組織運営なども学んでもらえる物と期待している。

### 6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

これまでの 2 期 6 年間の本事業の集大成として、12 月にマケレレ大学で開催したシンポジウムの最後に、African Primatological Consortium を設立することになった。これは、本事業の拠点機関を中心にさらに多くのアフリカ側研究機関を加え、霊長類の保護と研究を共同で進めるための連合体である。現在、ギニア、コンゴ民主共和国、ウガンダ、ケニア、タンザニア各国の研究者が登録したほか、アメリカ、イギリス、スイス、日本からも多数のシニア研究者が参加し、登録数は 3 月末で 65 名に及んでいる。

霊長類の最大の生息地であるアフリカであるが、これまでアフリカの若手研究者は、欧米および日本の研究者のカウンターパートとして補助約を担うことがほとんどであった。このコンソーシアムをアフリカ研究者が中心となって発展させることで、アフリカの研究者の自意識と研究者としての能力の向上が期待される。また、このネットワークは日本や欧米の若手研究者にも、さまざまな研究テーマを共同で進める土俵を提供することになる。

### 6-5 今後の課題・問題点

設立されたばかりの African Primatological Consortium であるが、将来的には完全な自立を目指すものの、軌道に乗り、独自に資金も獲得できるようになるまでは、側面支援が欠かせない。幸い、本事業の第 3 回目となる研究計画（2015～2017 年度）をお認めいただいたので、この 3 年間に自立に向けた指導・支援を行っていきたい。

### 6-6 本研究交流事業により発表された論文

平成 26 年度論文総数 8 本

相手国参加研究者との共著 2 本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

## 7. 平成26年度研究交流実績状況

### 7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成24年度	研究終了年度	平成26年度
研究課題名	(和文) チンパンジー属類人猿の孤立個体群の保全に関する研究 (英文) Conservation of isolated populations of great apes of the genus Pan				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 古市剛史・京都大学霊長類研究所・教授 (英文) Takeshi Furuichi・Primate Research Institute, Kyoto University・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Monkengo-mo-Mpenge Ikali・Research Center for Ecology and Forestry・General Director Bekeli Mbomba Nseu・University of Kinshasa・Professor Soumah Aly Gaspard・Environmental Research Institute of Bossou・General Director Bamamou Cece・University of N' Zerekore・Researcher Anguma Simon・Mbarara University for Science and Technology・Dean Baranga Deborah・Makerere University・Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数				17名
	(コンゴ民主共和国)側参加者数				16名
	(ギニア共和国)側参加者数				9名
	(ウガンダ共和国)側参加者数				17名
26年度の 研究交流活動	昨年度に引き続き、日本人研究者が2つの相手国に出張して、現地国の研究者と共同して、遺伝的多様性と人獣共通感染症に関するモニタリングと研究を継続した。日本人研究者が不在の場合でも、各現地国の研究者がデータ収集を継続できるような環境を整備した。また、各調査地におけるアフリカ側研究者の独自の調査研究活動を支援し、自律的な研究活動と成果発表がおこなわれるようにした。本年度現地調査を行わない参加研究者も、電子メールなどで連絡を取りながら、それぞれの本国でデータの分析、討論、論文の執筆を行った。また、最終年度となる本年は、各調査地から持ち帰った糞サンプルからDNAを抽出し、各個体群の遺伝的多様性と人獣共通感染症の関連に関する分析を行った。				

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「霊長類個体群の生態と保全に関する研究」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Ecology and conservation of primate populations“
開催期間	平成 26 年 12 月 15 日 ~ 平成 26 年 12 月 26 日 (12 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) ウガンダ共和国、ブウィンディ国立公園、マケレレ大学、カリンズ森林保護区、クイーンエリザベス国立公園
	(英文) Bwindi National Park, Makerere University, Karinzu Forest Reserve, Queen Elizabeth National Park, Uganda
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 古市剛史・京都大学霊長類研究所・教授
	(英文) Takeshi Furuichi・Primate Research Institute, Kyoto University・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) BASUTA Robert・Makerere University・Associate Professor

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (ウガンダ)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	8/ 184
	B.	5
コンゴ民主共和国 〈人／人日〉	A.	4/ 40
	B.	2
ウガンダ 〈人／人日〉	A.	7/ 14
	B.	12
ケニア (ウガンダ拠点) 〈人／人日〉	A.	1/ 4
	B.	
ケニア 〈人／人日〉	A.	
	B.	1
ルワンダ 〈人／人日〉	A.	
	B.	1
イギリス (日本拠点) 〈人／人日〉	A.	1/ 11
	B.	
イギリス (ギニア拠点) 〈人／人日〉	A.	1/ 11
	B.	
ベルギー (ウガンダ拠点) 〈人／人日〉	A.	1/ 50
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	23/ 314
	B.	21

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	<p>本事業のメインテーマである遺伝的多様性と人獣共通感染症に着目した類人猿の孤立個体群の保全に関する研究と、参加者各自が独自に取り組んできた研究の報告と討論を行う。また、セミナーの最後に、本事業の最終目的であるアフリカ霊長類学研究コンソーシアム（仮称）を設立し、今後の交流方法についてのプランを立てる。</p>		
セミナーの成果	<p>セミナーの開催によって、本事業のメインテーマである類人猿孤立個体群の保全に関する研究の成果が、拠点機関の研究者およびセミナーに参加したその他の機関の若手研究者によって共有された。本事業の拠点機関の他多数の研究機関・NGO を巻き込んだ <b>African Primatological Consortium</b> が設立され、ネットワーク型の学術協力体制が樹立された。</p> <p>シンポジウムの前後に行った研究と保護活動の視察では、異なる国の実情について、日本とアフリカ各国の研究者の相互理解が深まった。</p>		
セミナーの運営組織	<p>セミナーの計画は、ウガンダで研究を行う日本側研究者とウガンダ側研究者が共同で作成し、シンポジウムの運営は日本側研究者とウガンダ・マケレレ大学の研究者が、調査地視察のエクスクーションの運営は日本側研究者が行った。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	金額
		国内旅費	253,240
		外国旅費	4,077,800
		消耗品購入費	23,345
	その他経費	1,411,839	
	外国旅費・謝金等に係る消費税	441,038	
	( ) 側	内容	
	( ) 側	内容	

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
Research Center for Ecology and Forestry ・ Director of Science ・MBANGI Mulavwa	ウガンダ共和 国・ブウィン ディ国立公 園、マケレレ 大学	2014年 12月	研究活動の視察、共同研究の打ち合わせ、セミナーへの参加
University of Kinshasa ・ PhD student ・ MALOUEKI Ulrich	ウガンダ共 和国・ブウィン ディ国立 公園、マケレ レ大学、カリ ンズ森林保 護区、クイー ンエリザベ ス国立公園	2014年 12月	研究活動の視察、共同研究の打ち合わせ、セミナーへの参加

## 8. 平成26年度研究交流実績総人数・人日数

### 8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	日 月 年	日本	英国 (日本側)	コンゴ	ギニア	ウガンダ	合計
日本	1	( )	( )	( 6 / 340 )	( )	( )	0 / 0 ( 6 / 340 )
	2	( )	( )	( 1 / 55 )	( )	( )	0 / 0 ( 1 / 55 )
	3	( )	( )	1 / 137 ( 2 / 255 )	( )	4 / 78 ( )	5 / 215 ( 2 / 255 )
	4	( )	( )	( 1 / 80 )	( )	( )	0 / 0 ( 1 / 80 )
	計		0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 137 ( 10 / 730 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	4 / 78 ( 0 / 0 )	5 / 215 ( 10 / 730 )
英国 (ウガンダ側)	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	1 / 11 ( )	1 / 11 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 11 ( 0 / 0 )	1 / 11 ( 0 / 0 )
ケニア (ギニア側)	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	1 / 4 ( )	1 / 4 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 4 ( 0 / 0 )	1 / 4 ( 0 / 0 )
ウガンダ (1回限り)	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	7 / 20 ( )	7 / 20 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	7 / 20 ( 0 / 0 )	7 / 20 ( 0 / 0 )
コンゴ	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	4 / 40 ( )	4 / 40 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	4 / 40 ( 0 / 0 )	4 / 40 ( 0 / 0 )
ギニア	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )
英国 (ギニア側)	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	1 / 11 ( )	1 / 11 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		1 / 11 ( 0 / 0 )	1 / 11 ( 0 / 0 )
ベルギー (ウガンダ側)	1	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	3	( )	( )	( )	( )	1 / 62 ( )	1 / 62 ( 0 / 0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	0 / 0 ( 0 / 0 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 62 ( 0 / 0 )	1 / 62 ( 0 / 0 )
合計	1	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 6 / 340 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 6 / 340 )
	2	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 1 / 55 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 1 / 55 )
	3	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 137 ( 2 / 255 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	19 / 226 ( 0 / 0 )	20 / 363 ( 2 / 255 )
	4	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 1 / 80 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 1 / 80 )
	計	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 137 ( 10 / 730 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	19 / 226 ( 0 / 0 )	20 / 363 ( 10 / 730 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

### 8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	1 / 1 ( 0 / 0 )	1 / 1 ( 0 / 0 )	2 / 2 ( 0 / 0 )

9. 平成26年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	269,750	
	外国旅費	5,015,505	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	375,188	
	その他の経費	1,422,638	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	516,919	
	計	7,600,000	
業務委託手数料		760,000	
合 計		8,360,000	

10. 平成26年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成26年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
	[ ]	円相当
	[ ]	円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。